

おく ほそみち

奥の細道①

まつおばしろう
松尾芭蕉

つきひ はくたい かかく
月日は百代の過客にして、行きこころ年もまた旅人なり。舟の上に生涯
う うま くち おおむら かの
を浮かべ、馬の口とらえて老を迎ゆる者は、日々旅にして、旅を住みか
こじん おお たび しし よ
とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いずれの年よりか、片雲の風に
たぐ びようはく おおむら かいひん
誘われて、漂泊の思いやまず、海浜にさすらえて、去年の秋、江上の
はおく くも みるす はら くるた かすみ そら しらかわ
破屋に蜘蛛の古巣を払いて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の
せきいん がかみ へら くるた かすみ そら しらかわ
関越えんと、そぞろ神のものにつきて心を狂わせ、道祖神の招きにあい
とと て ともひき せむら かな おつ さんり
て取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に
まきつ ますし づ ころみ ころみ ころみ
灸すつるより、松島の月まず心にかかりて、住めるかたは人に譲り、
さんぢょう べつしよ うつ
杉風が別墅に移るに、

参考

くさ と す か よ ひな いえ
草の戸も住み替わる代ぞ雛の家おもてはちく いおつ はしら か お
表八句を庵の柱に掛け置く。

- 業之日本社
④ワイキペディア

【掲出文の大意】

月日は、いわば永遠の旅人のようなもので、来ては過ぎ去る一年一年もまた、旅人だといえる。また、舟をな
りわいとすする船頭も、馬で人を運ぶ仕事で一生を終える馬子も、毎日が旅のようなもので、言ってみれば旅その
ものを、自分の住み家としているのである。(そういえば)私の尊敬する昔の詩人たちも、多くは旅の途中で亡
くなった。(同じように)私も、いつの頃からか、ちぎれ雲の風に誘われるように、さまよい歩きたいという思
いを強く感じて、(近年)須磨の海岸などに旅をしていたが、去年の秋には、(住まいである)隅田川のほとりに
ある庵に戻り、久しぶりに住んでいた。(しかし)次第に、その年も押し迫るころには(心が騒ぎ)、春になれば、
みちのく(東北)の玄関といわれる、白河の関を越えて、旅立ちたいと思うようになった。そぞろ神が乗り移っ
たように心は落ち着かず、旅の神である道祖神が手招きしているように、なにごととも手につかない。(そこで、
旅の準備に)股引の破れを補修し、道中笠のヒモを付替え、足が疲れないという三里のツポにお灸をすえるなど
していると、みちのくの名所松島の月景色が頭をよぎるようになった。

私は、今まで住んでいた家を人に譲って(身の整理をし)、門人の杉風(さんぶう)の別宅にしばらく身を
寄せて準備を終えた。

草の戸も 住み替る代ぞ 雛の家

(自分が住んでいたころの庵は、男所帯で殺風景であったが、聞いた話では、今そこに住んでいる家族連れに
は、女の子がいるという。きつと今頃は、ひな人形などを飾って、小さいながらも華やかな雰囲気となっている
ことであろう。 季語＝雛の家 春)

この俳句を連句の最初の句(発句)として作り、旅の記念に、杉風の別宅の柱に貼りつけておくこととした。

【松尾芭蕉】

松尾 芭蕉(まつおばしろう、
寛永二十一年(一六四四年) -
元禄七年(一六九四年))は、
江戸時代前期の俳諧師。

三重県伊賀出身。江戸で俳
諧師として名を挙げ、それま
で滑稽や諧謔を主としていた
俳諧を、芸術性にまで高めた
といわれる。それは蕉風俳諧
として、高い評価を受け、俳
聖として、明治以降、世界的
にも有名となる。

蕉風俳諧の典型として芭蕉
が提示したのが、「古池やかわ
ず飛び込む水の音」である。
(諸説あり)

「奥の細道」は、俳文による
紀行文で、「夏草やつわものど
もが夢の跡」「荒海や佐渡によ
こたう天の川」などの名句が、
地の文と調和して深い感慨を
与え、高い芸術性を持った作
品となっている。
(詳細は次回)